



目次 ●

巻頭コラム「『令和』と鷗外」坂井修一(歌人・東京大学教授)

展示報告

展示のお知らせ コレクション展「文学とビール—— 鷗外と味わう麦酒の話」

展示会場から/地域情報

コラム「ベルリンからの便り」ベアーテ・ヴォンデ(ベルリン森鷗外記念館副館長)

活動報告/ショップ便り/カフェ便り

これからの催しもの/編集後記

巻頭コラム 「令和」と鷗外

明治から大正、昭和、平成ときて令和
これは万葉集の「梅花宴」が典拠という。大
伴旅人の大宰府時代のものだ。

「令和」。歌人として、万葉の言葉を元号
とするには誇りを感じるが、同時に警
戒心が湧くのも覚える。

国書を言うなら、勅撰の正史である『日本
書紀』やこれに準じる『古事記』を選ぶのが
良いのだろうが、それだと上意下達の感が
強い。勅撰ではないが、いさばん古い歌集で
ある『万葉集』を選び、しかも反主流派とし
て都から遠ざけられていた大伴氏の宴から
引く。これは文化的であると同時に政治的
な配慮に見える。周到な選びと思う。右に
「警戒心」と言ったのは、この周到さに対し
てである。

それはともかく、花開く日本文化という
意味で、期待もこめてまずはこれを嘉した
い。いっぽうで、世界はこれからはますます
グローバルになり、ますますIT化して、
超スマート社会と呼ばれるものになる。IT
の作る仮想空間と人間の作ってきた実空
間が融合した新しい世界だ。この国の伝統
文化が、超スマート社会に生き残れるもの
かどうか。これはおおいに心配なところだ。

さて、肝心の森鷗外である。『小倉日記』
によると、「令和」発祥の地大宰府を、鷗外
は小倉時代に少なくとも二度訪れている。

一度目は明治三二年一〇月二日。この日
松屋という宿に泊まった鷗外は、翌三日に
菅聖廟・観世音寺・戒壇院を訪れ、さらに
都府楼跡に赴く。この都府楼跡の描写が、
いかにも東京方面図を考案した彼らしく、

礎石の配置を定量的に観察し、これを丹念
に記したものだ。読んでいて思わず微笑し
てしまう。

小倉時代最後の大宰府訪問は、明治三五
年三月一九日。結婚したばかりの茂子を伴
うもので、この時は東京への乗船が決まっ
ていた。そのせいもあってか、特に面白い
記述はない。

「小倉左遷」と言われるように、鷗外には
不本意の思いがあり、同じ九州に配流され
た菅原道真に自分を重ねることは、このこ
ろ確かにあつたようだ。

「小生なども我は有用の人物なり。然るに
謫せられ居るを苦にせず、屈せぬは、忠義な
る管公（菅原道真）が君を怨まぬと同じく、
名譽なりと思はば思はるべく候」
（母峰子宛書簡 明治三四年某月一四日）

一方で、さらに古い大伴旅人も、鷗外
は自身の小倉での文学活動と重ねてみたの
ではないかと想像されるのだが、こちらに
ついては証拠を発見できなかった。

「令和」ということになると、歌人ならず
とも気になるのは、万葉集と鷗外の歌のつ
ながりだろう。

大君は神にしませば天雲の雷の上に庵
せるかも
『万葉集』 柿本人麻呂

大君の任のまにまにくすりばこもたぬ
薬師となりてわれ行く
『うた日記』 森鷗外

人麻呂の一首は天皇が雷岳に登り、ここ

坂井修一（歌人・東京大学教授）

に仮の宮を建てて籠ったときの作。勇壯な
言葉が続くハレの歌。様式美で権威を高め
るタイプの歌だ。鷗外の『うた日記』の作も
これに似て、明治天皇の命に従い日露戦争
に医師として従軍する自らを、力強いリス
ムとともに歌っている（くすりばこもたぬ
薬師とは、現場の治療に当たるよりもこれ
を指揮する軍医部長である自らを述べたも
のである）。

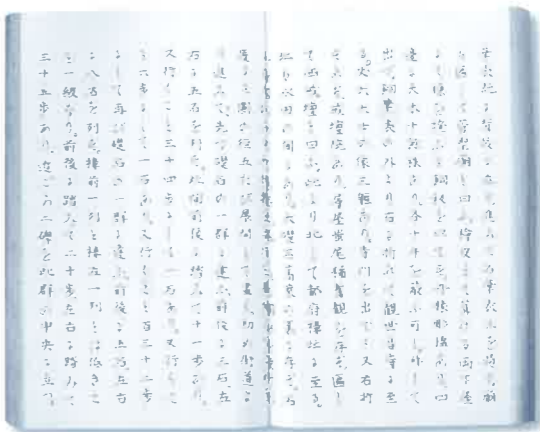
あな醜賢しらすと酒飲まぬ人をよく
見ば猿にかも似む
『万葉集』 大伴旅人

大多数が事へのみ起立する会議の場
に唯列び居り
『沙羅の木』 森鷗外

旅人の歌は、「讃酒歌十三首」の第七首。
鷗外のは「我百首」の第七十二首。酒飲まぬ
賢人を「猿」に喩え、「会議」の議題を「まが事」
という。どちらも強い皮肉のこめられた作
だ。

日本の和歌には、旅人以来こうしたフォ
ール humor が伝統としてあり、極端など
ころは狂歌との流れとなるのだが、鷗外は
「唯列び居り」と上品に収めている。しかし、
この表現なども、先の書簡の「名譽なりと思
はば思はるべく候」と同じく含意のあると
ころで、強烈な思いを秘めている。

旅人や鷗外の知識人としての怒りや悲し
みは、歴史を超えたところで共通点をもつ
ものだろう。それは知識人に限らず、万人
に共通するものでもあり、多くの読者が「よ



『小倉日記』浄写本 明治33年10月3日の項

くぞ言ってくれた」と共感するのではない
か。

「令和はその旅人由来の言葉である。言
葉の意味は「令く和する」（英訳 Beautiful
Harmony）」というのだが、旅人の作風か
らしても、この「和」のニュアンスにはな
かなか複雑なものがありそう。

鷗外の短歌作品を思っても、『うた日記』
の「薬師」から「沙羅の木」の「会議」の場まで
大きな振幅がある。この振幅を端から端ま
でゆったりとおおらかに受け入れることに
こそ、「令和」の本領があると私などは思う
のだが、さてどうなるだろうか。

坂井修一 さかい・しゅういち

昭和33年松山市生。歌人。「かりん」
編集人。歌集『ラビュリントスの
日々』（現代歌人協会賞）、『ジャ
ックの種子』（寺山修司短歌賞）、『ア
メリカ』（若山牧水賞）、『望楼の春』
（沼空賞）、『亀のピカソ』（小野市
詩歌文学賞）等。評論集『斎藤茂
吉から塚本邦雄へ』（日本歌人協
会賞）。現代歌人協会理事。日本文
藝家協会評議委員。東京大学情報
理工学系研究科教授。電子情報通
信学会業績賞等受賞。同学会フェ
ロー。

展示報告

特別展「一葉、晶子、らいてう」——鷗外と女性文学者たち——

会期：2019年4月6日(土)～6月30日(日)

本展を開催するにあたり、一葉、晶子、らいてうを取り上げたのは、鷗外が雑誌『中央公論』（明治45年6月）に発表した「写謝野晶子さんに就いて」という短い評論の中で、一葉、晶子、らいてうの三人を「女流のすぐれた人」と評したからにほかなりません。この端的な評論をヒントに、彼女たちの文学と鷗外が彼女たちに向けた眼差しを、第一章「樋口一葉」、第二章「写謝野晶子」、第三章「平塚らいてう」と、文壇に登場した順に紹介しました。

一葉、晶子、らいてうは現在にも名が残る女性文学者ですが、年齢も世に出た時期も異なります。その三人を並列させたことで、それぞれの個性が際立ちました。一家を養うために職業作家の道を選んだ一葉、夫・写謝野寛に導かれ浪漫主義的歌風を確立した晶子、三人の中で唯一高等教育を受けたらいてう——文筆を志すきっかけや表現方法、受けてきた教育、そして恋愛からも、三人の強い個性や生きた時代の移り変わりが見えてきました。また、三人の文業を見直すことにより、男性中心の文学界の中で、一葉、晶子、らいてうと

もに切磋琢磨した同時代の女性文学者たちの姿が浮かび上がってきました。多くは、その作品が読まれることも少なくなりましたが、こうした女性文学者たちがいたからこそ、一葉、晶子、らいてうの才能がいっそう開花したのかもかもしれません。

一葉、晶子、らいてうより先に、文壇での地位を確立していた鷗外は、性別に関係なく書かれたものを評価すべきだと考えていました。当時としては先駆的な視点を以て、三人の「すぐれた人」を見出したのでしよう。第一章では、鷗外が主宰雑誌「めざまし草」で一葉を高く評価し、一葉逝去後も彼女への心遣いを持ち続けたことを示しました。第二章では、他の二人に比べて特に親しかった鷗外と晶子の交流を物語る資料から、公私に渡る信頼と互いの尊敬の念を見出すことができました。第三章では、「新しい女」として好奇の目にさらされていたらいてうの活動に、鷗外が理解を示していたことを紹介しました。鷗外と三人との関わりにはそれぞれ差がありますが、性別の違い、年齢差、世間の評価などに

らわれず、彼女たちの著述と真摯に向き合い評価した、鷗外
のあたたかい眼差しを見ることができました。
女性を取り巻く環境は、明治・大正とは変化していますが、
現代においても女性の権利、立場、生き方などが議論の対照
となっています。今よりも強い偏見にさらされ、それぞれに
困難や逆境に立ち向かいながら、自らの創造力を信じて筆を
執った一葉、晶子、らいてうの生涯、彼女たちが紡ぎ出した
言葉、そして鷗外が彼女たちに向けた公平な視点から、私た
ちはまだまだ学ぶことが多くあることに気づかされました。
最後になりましたが、本展を開催するにあたり、ご協力賜
りました関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。

展覧会期間中、左記の通り関連講演会を開催しました。

「近代を奔る——一葉、晶子、らいてう」

講師：三枝昂之氏（歌人、山梨県立文学館館長）
日時：6月2日(日) 14時～15時30分

「森鷗外と新しい女たち」

講師：尾形明子氏（文芸評論家）
日時：6月8日(土) 14時～15時30分

撮影：カロワークス



導入展示室。鷗外、一葉、晶子、らいてうのイラストは、本展のための描き下ろし。



第一展示室。一葉（第一章）、晶子（第二章）前半部分。一葉、晶子、らいてうをそれぞれ緑、赤、青のイメージカラーで色分けした。



一葉ゆかりの文芸雑誌と、一葉作品が掲載された文芸雑誌を紹介。一葉、晶子、らいてうの活躍の多くを、当時の雑誌に見ることができる。



第二展示室。晶子（第二章）後半部分とらいてう（第三章）。



らいてうが学んだ日本女子大校（現・日本女子大学）の資料の数々。

展示のお知らせ

コレクション展

文学とビール

鷗外と味わう麦酒の話

誕生日に贈られた
ビールジョッキ



「とりあえずビール」と、現在では手軽に飲むことができるビール。江戸時代末に日本にもたらされたビールは、明治に入つて本格的に醸造され始め、広く飲まれるようになったのは明治40年代以降のことでした。

鷗外は、日本ではまだビールが貴重だった明治17年から21年まで、陸軍軍医としてドイツに留学し、本場のビールを楽しむました。留学中の日記『独逸日記』では、鷗外が醸造所やオクトーバーフェスト(ビール祭り)を訪れたり、自ら被験者となつて「ビールの利尿作用」について研究していたことが分かります。こうした鷗外のビール体験は『うたかたの記』(明治23年)などの作品に生かされました。また、同時代の文学者たちもビールを作品中に描きました。夏目漱石『吾輩は猫である』(明治38、39年)、太宰治『酒の追憶』(昭和23年)に見られるおもてなしや晩酌としてのビール、高村光太郎『カフエ、ライオンにて』(大正2年)に見られる酒場の様子など、文学作品には明治・大正から現代に通じる様々なビールのある風景が登場します。本展では、鷗外のビール体験に触れると共に、文学作品に登場するビールのある風景を、所蔵資料から紹介します。この夏、ビールを切り口に文学作品を味わってみませんか。

展示会場から

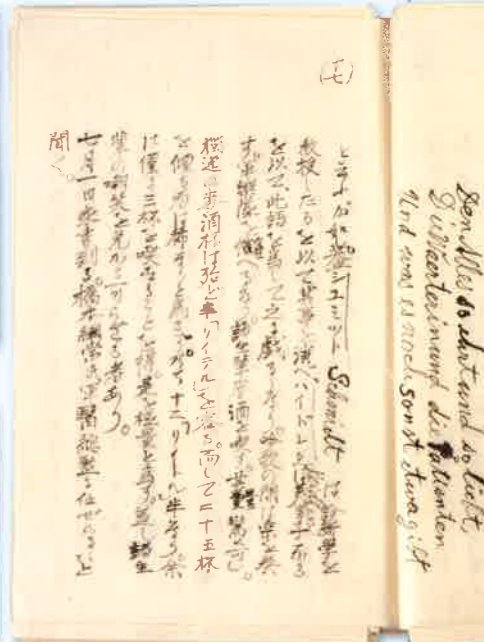
ビールジョッキ

[100018]



当館には、森鷗外旧蔵のビールジョッキがあります。蓋付きの柘器製で、蓋の縁の金属部分に「W. Roth, d. St. A. Rintaro Mori z. E. 19. Jan. 1886 (1886年1月19日の記念に、W. ロートから一等軍医森林太郎へ)」と刻まれています。

陸軍軍医だった鷗外は明治17年から21年、衛生制度調査及び軍陣衛生学研究のため、ドイツに留学しライプチヒ、ドレスデン、ミュンヘン、ベルリンに学びました。鷗外がドイツに滞在し学んだ日々は『独逸日記』に書き残されています。ビールジョッキに刻まれた日付(鷗外の満24歳の誕生日)の翌日には「夜口オト余がために生誕の筵をその家に開く。来賓二十余名。口オト余を延いて一机卓の前に至り、演説す。卓には胎を列す。則ち麦酒蓋一蓋に千八百八十六年一月十九日の記念のために一等軍医森林太郎に贈る中ルヘルム・ロート Wilhelm Roth, d. St. A. Rintarau Mori z. E. 19. Jan. 1886の文を彫る(後略)」と記されており、ジョッキがロートからの誕生日祝だったことが分かります。



『独逸日記』明治18年6月27日の項(部分)



『うたかたの記』「しがらみ草紙」11号 明治23年8月



夏目漱石『吾輩は猫である』上編 大倉書店 明治39年1月 4版



森茉莉『独逸と麦酒』(『私の美の世界』新潮社 昭和43年6月)



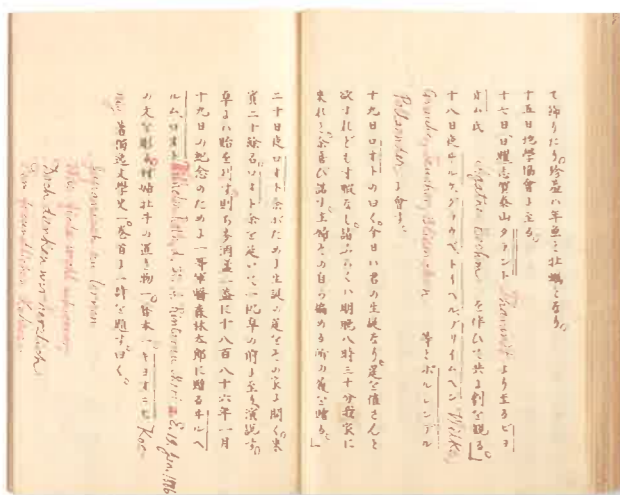
「Ueber die diuretische Wirkung des Biers (ビールの利尿作用について)」明治20年

会 期 ● 2019年7月5日(金) - 10月6日(日)
 会 場 ● 文京区立森鷗外記念館 展示室2
 開館時間 ● 10時~18時(最終入館は閉館の30分前)
 ※7月9日(火)、8月25日(日)は9時より開館
 ※8月3日(土)は21時まで開館
 観覧料 ● 一般300円(20名以上の団体・2400円)
 ※中学生以下無料、障害者手帳ご提示の方と介護者1名まで無料
 ※文京ふるさと歴史館入館券、パンフレット押印入、友の会会員証ご提示で2割引き
 ※その他各種割引がございます。詳細は記念館HPをご覧ください。
 ※8月25日(日)は文京区内在住・在勤・在学の方に限り、展覧会を無料で観覧できます。身分証明書を提示してください。

軍医監ヴィルヘルム・アウグスト・ロート(1833-1892)は、ザクセン王国第十二軍団軍医部長を務めていた人物です。『独逸日記』によると鷗外は明治18年4月29日に出会い、以後ロートの計らいによつてドレスデンで行われた秋期演習や冬期軍医講習会に参加し、学びました。ロートが開いた鷗外生誕の宴は、軍医講習会の最中のことでした。

『独逸日記』には他にも、ドイツのビールジョッキについて記した箇所がいくつも見受けられます。ライプチヒ滞在中の明治18年6月27日には、「独逸の麦酒杯は殆ど半リイテル」を容る。而して二十五杯を傾る者は稀なりと為さず。乃ち十二リイテル半なり。余は僅に三杯を喫することを得。是を極量と為すと、ジョッキの大きさについて記し、ドイツの人々が12リットル以上も飲むことに驚いています。この時鷗外は、1.5リットルが限界でした。その一年後の明治19年7月29日には、「公使(注・品川弥二郎)又曰く。諸君善く酒を飲む。曾て聞く。拜焉の民飲むに「マアスクルウグ」Maskingを以てすと。諸君も亦時に之を用ゐること無きかと。余近衛公、加藤照磨と「クルウグ」Krugを傾く。飲を竭して帰る。「クルウグ」は「リイテル」の麦酒を容る、陶器なり」とあります。

明治21年9月 帰国した鷗外は、ビールジョッキを持ち帰り、その後千駄木の観潮楼(現・文京区立森鷗外記念館)の書齋に飾っていました。



『独逸日記』浄写本 明治19年1月20日部分

関連事業のお知らせ

展覧会期間中に関連講演会を予定しております。申込方法は8頁をご覧ください。

「森鷗外とドイツ・ビール」

講師 美留町義雄氏(大東文化大学教授)
 日時 9月7日(土) 14時~15時30分
 会場 文京区立森鷗外記念館 2階講座室
 定員 50名(事前申込制)
 料金 無料(参加費と本展の観覧券半券が必要)
 申込締切 8月23日(金) 必着

ギャラリートーク

展示室にて当館学芸員が展示解説を行います。
 7月24日、8月21日、9月18日
 いずれも水曜日14時~(30分程度)
 申込不要(展示観覧券が必要)

学生ボランティアによるギャラリートーク

展示室にて文京区内大学の有志が展示解説を行います。
 9月1日(日)11時~14時(30分程度)
 申込不要(高校生以上の方は、展示観覧券が必要)

同時開催

コレクション展開催中に、左記コーナー展示を開催します(展示室1)。展示観覧券で、コレクション展と共にご覧いただけます。

ドイツ三部作

『舞姫』『うたかたの記』『文づかひ』を、鷗外のドイツ留学体験などを交えて紹介します。
 <展示期間>7月5日(金)~10月6日(日)の開館日
 鷗外記念展示
 7月9日の鷗外命日(鷗外忌)にちなみ、鷗外「遺言書」の原資料を展示します。
 <展示期間>7月5日(金)~31日(水)の開館日

地域情報

小石川植物園

小石川植物園の名称で親しまれる東京大学大学院理学系研究科附属植物園は、植物学の研究を目的とした東京大学の教育実習施設です。貞享元(1684)年に江戸幕府が設けた「小石川御薬園」が前身とし、明治10年に東京大学附属植物園となり、一般公開されるようになりました。日本最古の植物園としてもよく知られています。

鷗外は同園とゆかりが深く、『鷗外日記』では子ども達を連れて度々訪ねていることが分かります。また、大正元年に発表した小説『田楽豆腐』にも、小石川植物園が登場します。「あなた植物園へ入らつしやつて」という台詞から始まる同作は、主人公の木村が購入した「西洋草花」を調べるために小石川植物園を訪れるというものです。題名は、「田楽豆腐のやうな」樹木札を指しています。また、園内にある東京大学総合研究博物館小石川分館は、明治9年建築の旧東京医学校本館で、鷗外も通っていた建物です。当館で展覧会を見た後は、小石川植物園まで足を伸ばしてはいかがでしょうか。



東京都文京区白山3-7-1
 開園時間 ● 9時~16時30分
 休 園 日 ● 毎週月曜日(休日の場合は開園し翌日休園)、年末年始
 入 園 料 ● 一般400円、中・小学生130円

ベルリンからの便り

2019年はドイツにとって幾重もの意味で節目の年だ。そのため、全国で数々の講演会や展示会、式典が予定されている。例えば、「パウハウス100周年を記念したイベントや展示会」は年明けから次々と開催されている。パウハウスに関わった日本人もテーマに取り上げられ、ベルリンのみならず、ワイマール、デッサウにおいても講演会や展示会が開かれている。

当館が所属するフンボルト大学でも、大学名の由来となった人物、アレクサンダー・フォン・フンボルトの生誕250周年を祝した行事が目白押しだ。9月の初めには「フンボルト週間」が予定されているほか、6月15日の「學術の長い夜」というイベントでは私も彼についての短い講演を行う。この講演では「アレクサンダー・フォン・フンボルトと日本」、もしくは「森鷗外のアレクサンダー・フォン・フンボルト評」をテーマに考えている。会場は当館から500mほど離れた場所にある「動物解剖学劇場」(Tieranatomisches Theater)だ。この建物は、ブランデンブルク門を設計した建築家、ラングハンの建築で、ベルリン市内でもっとも古い大学施設だ。

さらに、11月にはベルリンの壁崩壊から30周年の記念式典が催される。30年前に人々が壁の上でどのように踊っていたか、テレビで流れた映像を覚えておいての方はいらっしやるだろうか。ひるがえって現在、世界のどこかで大統領が全力で壁の建設を

計画しているという報道を耳にするたび、間違った映画を観ているような気持ちになる。

壁崩壊30周年を記念して、当館においても一足先に1月10日から6月18日までペーター・ブルーネ氏の写真展を開催している。写真展の初日には、120人以上の方が足を運んでくださり、その後も来訪者を魅了している。

ブルーネ氏がかつて私のコンピュータ担当アシスタントで、10ヶ月間の東海大学の留学を機に日本に渡った。現在はアートディレクターとしてマガジンハウスに勤務している。東ドイツ出身のブルーネ氏が日本にいるのは、壁の崩壊のおかげと言えるだろう。

また、7月からは鈴鹿墨の展示会を予定している。きっかけは、三重大学に研究滞在した際に鈴鹿墨職人の方を紹介していたとき、工房を訪れたことだ。

2019年、東京とベルリンは友好都市提携25周年を迎える。ベルリン独日協会は、これを機にリレー講演会を主催し、3月5日に赤の市庁舎で第1回目の講演が開かれた。私はその1回目に登壇する機会に恵まれた。棚橋半蔵について話をした。棚橋半蔵は、日本人の父とドイツ人の母の間に生まれたベルリン人で、私が長年にわたり少しずつ調査を進めてきた人物だ。これほどリレー講演会第1回目にふさわしいテーマはないだろう。彼は、有名な芸術家、マックス・

クリンガーに自身の妻の胸像を作らせたことでドイツ芸術史に足跡を残している。一方、日本においてはサボテン栽培で知られている。20世紀初頭、彼はドイツからサボテンを輸入し、その栽培を日本に広めようとした。謎に満ちた人生を歩んだ酔狂な男だ。

半蔵の父は棚橋軍次といい、1851年に名古屋で生まれた。1894年に大磯で亡くなるまで、欧州各地の日本公使館で書記官を務めた。鷗外とも親しくしており、『独逸日記』にもしばしば軍次の名前が登場する。鷗外はベルリンやウィーンにおいて軍次と会い、食事を共にしたようだ。こうした意味で、棚橋半蔵と鷗外は無関係ではない。

半蔵の母、イダ・ブランドはマクデブルク出身だ。『独逸日記』をお読みになった方には、谷口謙がカールスルーエで開かれた国際赤十字会議に出席した後、ウィーンに向かい、またドイツのマクデブルクに戻った記述があるのをご記憶の方もいらっしゃるだろう。谷口はこの時、ドイツ人女性、ラウラ・ブランドとの結婚式の準備のためにマクデブルクに赴いたのだが、この女性は半蔵の母の妹、つまり叔母にあたる人物だ。ちなみに、この結婚は実現にはいたらなかった。棚橋半蔵、またその家族についてはまだ明らかになっていないことが多い。しかし、私はいつか日本でこの棚橋一家についてご紹介したいと考えており、その日

までに新たな興味深い事実が見つけれられるよう努力するつもりだ。

このベルリン―東京友好都市提携25周年にあたっては、文京区区長の成澤廣修氏を8月末にベルリンにお迎えすることも予定している。前回成澤区長がベルリンにおいてになったのは2014年のことで、当館開館30周年式典にご参加いただいた。1984年に当館が開館した際は、記念室「しか」なく、ほかの部屋は改装中だった。今日のような博物館の姿になったのは開館から5年目の30年前のことだ。そのお披露目でも言うべき2回目のオープンは、1989年6月2日だった。このオープニングセレモニーには、鷗外の孫である森真章氏と妻の里子氏、長谷川教授、アサヒビール株式会社社長雪時樋口廣太郎氏、昭和電工株式会社社長雪時鈴木治雄氏などがご参加くださった。私が館内で特別展を企画したのも、この時が最初である。

この式典から5ヶ月後、ベルリンの壁は崩壊し、かつて当館が建設許可を請うた国、東ドイツもいまや存在しない。

あれから30年、今年の6月2日は私はオーストリアにいるはずだ。30年前のあの式典を覚えている日本の鷗外関係者とともに、オーストリアからシャンパンで祝杯をあげよう。

【2019年3月執筆】

活動報告

「モリキネ★ブックトーク」開催!



4月29日、「モリキネ★ブックトーク」を開催しました。前日に行われた一箱古本市に引き続き、本好きが集まるイベントです。司会に編集者の南院綾繁氏をお迎えし、文京区内の書店(BOOKS青いカバ)から小国貴司氏、同じく区内の出版社(羽鳥書店)から羽鳥和芳氏、そして当館司書の岩佐春奈が登壇しました。それぞれ形は違いますが「本」に携わる仕事をしている4名に、本にまつわるエピソードを大いに語っていただきました。

普段どのように本に携わっているかを交えた自己紹介に始まり、影響を受けた本や、今後の展望をそれぞれ語りました。出版社の楽しい真話や、皆さん文京区にゆかりが深いこともあって、谷根千地域や当館の前身・鷗外記念本郷図書館(現在図書館機能は移転)についての懐かしい話題もあり、地元に着したイベントとなりました。

質疑応答では気軽な雰囲気質問が挙がり、会場は和やかな空気に包まれました。「本」をきっかけとしたコミュニケーションで、登壇者と参加者の距離が縮まるとなりました。



左から羽鳥氏、小国氏、南院綾氏、岩佐

新・観潮楼歌会

東直子の「短歌日記とエッセイ」



5月18日から3週にわたり、人気の歌人である東直子氏を講師にお招きし、連続講座を開催しました。東氏の

作品「かえってきた指紋」(坂の上の記憶)などのように、エッセイと短歌とを組み合わせた作品の、作り方や楽しみ方を学びます。第一回目では、東氏から日記を書く喜びや、エッセイや短歌を実際にどのように作っていくのかというお話をうかがいました。第二回目では、参加者がそれぞれ持ち寄った短歌日記(日々の暮らしを日記に綴り、短歌で表現するというもの)を発表、講評し合いました。第三回目では、日記をエッセイに仕上げ、短歌を添えて一つの作品として完成させました。

参加者の中には多くの若い女性が目立ち、華やかな教室となりました。互いに作品を講評し合い、笑いや感動を共感する場面がありました。



ショップ便り



森鷗外記念館NEWS 21号と23号で紹介した「鷗外書簡手拭い」の新作が発売になりました。前回同様、親友・賀古鶴所に宛てた書簡(明治35年2月8日付)のプリント

はそのままで、紺色をえんじ色に変えて作成しました。色が変わると印象も大きく変わります。すでに紺色をお持ちの方も、新たに手に取っていただければと思います。さらに、A5サイズクリアファイルに新しい柄が仲間入りしました。今回のモチーフは満を持して登場のビールジョッキです。



ビールジョッキクリアファイル 300円

クリアファイルの表裏に、それぞれビールジョッキの正面と背面をあしらひ、ジョッキに沿ってかたどっています。また、取っ手の部分には小さく穴が開いており、実物のジョッキのように指が入るようになっていきます。遊び心あるクリアファイルで土産に最適です。コレクシヨン展「文学とビール」に先立って販売中です。



カフェ便り



シユラウフェ 550円

モリキネカフェでは、今年3月から始まった「パン屋さんのアップルパイ」が大変好評でした。アップルパイにバナナアイスを入れて自家製のフルーツプレザーブを添えた、見た目以上にボリュームのあるデザートです。限定商品のためアップルパイは4月で終了しましたが、アップルパイをシユラウフェというスライスをアーモンドがたぐさん乗ったデニッシュに変え、デザートメニューとして展開中です。こちらは通年お楽しみいただけます。

また、夏に向けて冷たい飲み物メニューが増えました。昨年に続くフロートに加え、グリューワインティーとオレンジジュースを組み合わせたトロピカルなドリンク(写真左)をご用意しました。赤とオレンジの発色が美しい一杯です。そしてコレクション展「文学とビール」開催に併せ、島根県のブルワリー・石見麦酒オリジナルのクラフトビールを提供します。展覧会観覧後は是非ビールで乾杯してください。



ワインクーラーソーダ 500円

これからの催しもの

催しは◎以外は全て事前申込制です。連続講座はすべての回にご参加いただける方に限ります。各申込締切日必着でお申込みください。詳細は、チラシやHPをご覧ください。詳しくは、チラシやHPをご覧ください。★応募多数の場合抽選とさせていただきます。★悪天候等やむを得ない事情により、日程・講師・内容を変更する場合があります。

7月5日(金)～7日(日)
11:00～18:00

セタイベント◎

会場：当館前、エントランス
料金：無料
期間中、エントランスに短冊作成コーナーを設置します。

7月9日(火)
9:00～17:30

鷗外忌記念行事◎

鷗外の命日(7月9日)に展覧会を観覧された方に、オリジナルしおりをプレゼントします。

7月14日(日) 14:00～15:30

鷗外忌記念講演会「わたしの森鷗外——医学と文学」

講師：加賀乙彦氏(作家、当館名誉館長) 会場：講座室 料金：2,000円
定員：50名 申込締切：7月1日(月)必着
自身の文学活動や鷗外との関わりなど、医師として作家としての半生を語ります。

8月3日(土) 19:00～20:30

新・観潮楼歌会 講談「応挙の幽霊画」

出演：一龍齋貞橘(講談師) 会場：講座室 料金：2,000円
定員：50名 申込締切：7月22日(月)必着
怪談話と鷗外作品を題材にした新作の二席です。

8月4日(日)、18日(日) 10:30～12:30

文の京ワークショップ「夏休み読書感想文教室」(全2回)

講師：千葉尊子氏(全国図書館協議会) 会場：講座室 料金：1,000円
定員：20名 対象：小中学生 申込締切：7月30日(火)必着
鷗外作品「最後の一句」を読んでご参加ください。

8月23日(金) 11:00～17:00

文の京ワークショップ「ベルリンの森鷗外記念館へ手紙を出そう～エメールを書いてみる～」◎

会場：エントランス 料金：無料

8月25日(日) 13:30 / 15:30 各回60分

「夏休み!千駄木映画まつり」◎

会場：講座室 料金：無料
定員：50名(先着順/当日整理券配布)

鷗外と文人たちとの交流や、文人ゆかりの街・文京区を紹介した映画「ぶんきょうゆかりの文人たち——観潮楼をめぐって」を上映します。

9月7日(土) 14:00～15:30

展示関連講演会「森鷗外とドイツ・ビール」

講師：美留町義雄氏(大東文化大学教授) 会場：講座室 定員：50名
料金：無料 ※要本展観覧券(半券可) 申込締切：8月23日(金)必着

9月8日(日) 10:30～12:30

文の京ワークショップ「こどもてつがく」

講師：菰池依里氏(philokids TOKYO) 会場：講座室 料金：1,000円
定員：12名 対象：小学生 申込締切：8月26日(月)必着
こども達から自然に湧き出る問いについてみんなで対話し、問いを深めることを目的とした対話活動の時間です。

9月23日(月・祝)、10月23日(水) 13:30～15:30

文の京ワークショップ「感謝と喜びを伝える『笑い文字』～ありがとうを送ろう～」(全2回)

講師：廣江まさみ氏(笑い文字普及協会代表理事) 会場：講座室 料金：4,000円 定員：30名 申込締切：9月9日(月)必着

笑い文字は、満面の笑顔を渡す筆文字。書きやすい朱と黒の筆ペンを使い、感謝の気持ちを送る笑い文字の書き方を学びます。

◆◆上記イベントの申込方法◆◆

事前申込制のイベントは、各申込締切日までに下記のいずれかの方法でお申込みください。申込みは、1通につき1名様(はがき・Eメールどちらかお一人様1通まで)、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。申込締切後1週間以内に抽選結果をお知らせします。

- ①往復はがき 往信に参加希望プログラム名・日程・氏名(ふりがな)・住所・電話番号、返信用には、住所・氏名を明記の上、〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 文京区立森鷗外記念館イベント係までご応募ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号をご記入ください。
- ②Eメール 件名に参加希望プログラム名・日程・本文に氏名(ふりがな)・Eメールアドレス・電話番号を明記の上、bmk-event@moriogai-kinenkan.jp までご応募ください。 ※参加可否のご連絡をEメールでいたします。当館からのEメールが受信可能なEメールアドレスをご記入ください。受信制限が設定されている場合、当館からのEメールを受け取れないことがありますので、あらかじめご確認のうえ送信ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号もしくはEメールアドレスをご記入ください。

[ご提供いただきました個人情報は、個人情報保護法に基づき適切に管理し、当該プログラム以外での使用はいたしません。]

編集後記

2019年1月から3月に開催したコレクション展「少しも退屈と云ことを知らず 鷗外、小倉に暮らす」で、大学生有志によるギャラリートークを開催しました。展示は当館所蔵の『小倉日記』『小倉日記附録』を中心に、鷗外の小倉赴任中の暮らしを「生活、文学」「職務」「史跡探索」の3部構成で紹介したものです。学生ギャラリートークは、参加学生が希望するコーナーを一つ選び解説するというもの。鷗外がどのように史跡探索を行っていたのかを『小倉日記』の記述などから具体例を紹介する学生や、小倉赴任中の勤務経路などについて実際に小倉に足を運んで撮影した写真を使い紹介する学生など、普段のギャラリートークとは違う角度からの解説に、観覧者も興味深い様子で耳を傾けていました。学生ギャラリートークは「文学とビール——鷗外と味わう麦酒の話」でも実施予定です。学生ならではの柔軟な発想、視点から繰り広げられる解説を聞きに来てください。



- ### 交通案内
- 電車をご利用の場合
 - ・東京メトロ千代田線「千駄木」駅 1番出口 徒歩5分
 - ・東京メトロ南北線「本駒込」駅 1番出口 徒歩10分
 - ・都営三田線「白山」駅 A3番出口 徒歩15分
 - ・JR山手線・京成線「日暮里」駅 南口 徒歩15分
 - バスをご利用の場合
 - ・都バス 草63番系統「千駄木一丁目」下車 徒歩1分
 - ・都バス 上58番系統「団子坂下」下車 徒歩5分
 - ・B-ぐる千駄木・駒込ルート「18特別養護老人ホーム千駄木の郷」下車 徒歩5分
- ※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください
- 〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 TEL: 03-3824-5511
URL: <https://moriogai-kinenkan.jp>

文京区立
森鷗外記念館
Mori Ogai Memorial Museum

開館時間 10:00～18:00(最終入館は17:30)
休館日 毎月第4火曜日(祝日の場合は開館、その他例外あり)、年末年始(12月29日～1月3日)、及び展示替期間、換装期間等